

## 英文法拾遺Ⅹ

伊藤 清

(E) *for*(1) *I wish for a person to do* の形について

*I only wish you to remember that you are primarily at Harvard to broaden and to improve your mind and I want you to remember that how you behave reflects both on your parents and your family.*—J. P. Marquand: *The Late George Apley* (ただ覚えておいてもらいたいことはお前がハーバードに入ったのは本来物の考え方を広くし高めるためであるということで、またお前の行動が自分の両親や一家のいずれにも反映するものであるということも心して欲しいのだ。)

この引用文中の *I wish (or want) you to remember* の形は話者が自分と同じか或いは目下に対して面と向って「～してもらいたい、～してくれ」という命令的な意味に使用される。*wish* と *want* では後者が命令としての欲求性がより強く表われていて、それだけ命令としては強いが、双方とも日常語として文章、話し言葉の孰れにも普通に用いられている。また *wish* と *want* の感じの差は普通に使用される *I want a pen* に対して *I wish for a pen* は(ペンがあるとよいと思うのですが、ペンを頂けたらと思うのですが、ペンを頂戴したいのですが)のように *want* より卑近性、切迫性、直接性が少なく、あるものがないのを感じて、あればよいのだがという希求性を示し、それだけ間接性、客観性、婉曲性を示し、*want* より改まった、そして時には丁寧な気持がある。勿論通常は *I want* の形を用いる方が圧倒的に多い。*I wish you to do* は節であれば *I wish you would do* となるであろう。

(a) この *I wish (or want) you to do* に似た形で *wish (or want) for a person to do* のような形がある。次のト書の文

They (Biff and Happy) are both eager, overjoyed at seeing Willy, wishing *for* him to command them, and Willy is full of power and pleasure as he gazes offstage toward the car.—Arthur Miller: *Death of a Salesman* (2人は共に夢中であり、父ウイリーに会って悦びに溢れ、父が自分達に用事を言いつけるように望んでおり、ウイリーは舞台奥の車の方を見ながら力と悦びとに満ち溢れている。)

では *for* が用いられている。この *wish for a person to do* の形は *for* が入っているだけ *to do* の主語たる相手の主体性を認めている気持が強くなる。換言すればそれだけ間接性、客観性、婉曲性などが加わり、命令ではなく、あることを希求する気持が強くなる。つまり父ウイリーが「あれをやれ、これをやれ」と言うのを兄弟2人が心待ちしている様を示している。この表現は *wishing that he would command them* のように *paraphrase* できるであろう。

*Want* の場合も *I want for you to do it at once* のように *want for* と使うことが時々ある。*I wish for some more charcoal* のように *wish for* と用いる *wish* (自動詞) に倣って、他動詞として直接目的語を取ることができる *want* (*want for* は、*He wants for nothing* 「何も不足を感じていない」のように欠乏を感じるの意の *want* (自) の時に *for* を用いるのが普通) に *for* を付けて「望む、求める」の意を表わそうとすることは *vulgar* として非難されるが、*I want you to do* に *for* というクッションを入れて *I want for you to do* とし、*to do* の意味上の主語をより強く示し、*I* と *you* との間を隔てて *want* なる他動詞に前記 *wish for* の *wish* (同様に *I hope for the book to make its mark* 「その本がその名を残すものであってほしい」の *hope*) の如き自動詞の持つ感じを付与し、*I* の *you* に対して直接及ぼす影響の度合を加減することによって *you* の自主性をより強く感ぜしめ、以て *you* に命令するの感を減らすと共に、希求性、願望性を強調する効果をあげようとしているものである。

*I like you to do* の場合にも時に *I like for you to do* の形を見るが、この場合も *I want for you to do* の場合と同じくむき出しに命令するのを和らげようとする心理が働いていると考えることができる。

*I'd like for you to know that even if I hadn't wanted anything from you I'd still've*

...—Kingsley Amis: *Take a Girl Like You* (あなたに知っていただきたいのはたとえ私があなたから何も望まなかったとしても私は尚……)

“I can remember it,” the old man said. “I’ll waken you in time.”

“I do not like *for* him to waken me. It is as though I were inferior.”

“I know.”—Ernest Hemingway: *The Old Man and the Sea*

(「わしにも覚えがある」と老人が言った。「間に合うように起しに行ってやるよ。」  
「親方には起してもらいたかないんだ。何だか自分ができがよくないみたいだからね。」  
「分った。」)

Frankie: Well, then I’ll entertain you. What do you want to do? Would you like *for* me to read to you out of *The Book of Knowledge*, or would you rather do something else? —Carson McCullers: *The Members of the Wedding*

更に like でなく love を用いた例も見られる。

I met a lot of guys who loved *for* me to ram their asses, no matter how big I am.—Marty Strutt: *Bisexual Swapping* (私がどんなに大きくても私に尻を蹴とばしてもらいたがる奴に沢山出会った。)

尚上例の Would you like *for* me... に関しても既に述べたように, Would you like me... と相手に対し自分に命令的に「私に～させたいか」と尋ねるよりも, 相手の自分に対する気持, 態度を察して, 自分の主体性を相手が認めて「私に～することをお望みですか」と尋ねる方が直接的感覚がうすれた丁寧な云い方と言うことができる。前者の *for* のない形が直接的に欲するのに対して, 後者はそういう situation を欲するという違いがある。最後の例の場合も loved me とすれば動作が直接的感じを与えるであろう。

(b) 次の第1例では want *for* の形が Boston の名家の出で Harvard Law School を出た紳士の書翰の中で使用されている。want の後に particularly や第2例の如く very much などが使用されると他動詞 want とその目的語とが引き離されて不自然な形となり *for* が必要となる。例えば第2例に於て *for* を用いないですまそうとすれば I very much want him となるか, I want him very much となるであろうが後者ではこの副詞が want と to be happier の孰

れを修飾するか紛らわしくなる。また原文の形であれば命令の直接性を減少させ、代って希求性、願望性を強めるという効果も生ずる。

I think it better that we both refrain from discussing various matters until you return. I want *particularly for you* to consider your mother.—Marquand: *George Apley* (私は私達2人ともお前が帰って来るまで様々な問題を論ずることは差し控える方が良いと思っている。私はお前がお母さんのことを考慮することを特に望んでいる。)

I want *very much for him* to be happier than I have been, though heaven knows I have every reason to be happy enough.—Marquand: *ibid.* (確かに私は十分幸福であるべきあらゆる理由を持っているけれど、彼に今迄の私以上に幸福になるようひたすら望んでいる。)

次の *like* を用いた文も上記の場合と同様な性質のものである。副詞 *fine* は *very much* を意味する。

‘Yes, it’s a good story all right,’ said the big-faced man.  
‘I’d like *fine for* Elsa to hear that story.’—John Wain: *Hurry On Down*  
(「うん、そいつは確かにいい話だ」大きな顔の男が言った。  
「是非エルサにその話を聞いてほしいもんだ」)

## (2) a train *for* (or *to*) Tokyo の形について

*For* は離れた目標を示す符号である。

‘He’ll take you to the station,’ said Calvin.  
‘There’s a train *for* Naples in less than half an hour.’ He opened the door of the car.—Iris Murdoch: *The Flight from the Enchanter*

I remembered suddenly that there was a midnight train *for* Chicago.—Aldous Huxley: *The Genius and the Goddess*

There’s a train *to* London at 10.14.—Richard Aldington: *Soft Answers*

Rober’s aunt...went off to catch the train to Stanford.—John Updike: *Pigeon Feathers*

(a) 意味。Train の後に *for, to* が付けられて train を直接形容詞的に修飾する場合、*for* を用いた時はその列車の行き先、即ちその列車が示された駅を最終到着駅としてそれに向って運行されていることを意味し、*to* を用いた時はその示された駅が列車の最終到着駅であろうと途中駅であろうと、その示された駅に到着することを意味するのが原則である。例えば名古屋を最終到着駅とする、所謂名古屋行き列車は a train *for* Nagoya であるから名古屋行き列車に乗るのは take a train *for* Nagoya であるが、名古屋に行こうとする時には乗る列車が名古屋止りであろうと東京行きであろうと、名古屋に着くかどうかを考えるのが普通であり、列車の最終到着駅は余り問題にはしない。そのように考える時には a train *to* Nagoya のように表現される。一般的に言って *for* は行為者（この場合乗車している者）と間接的關係にあり、これに対し *to* は直接的關係にあると言える。更に言えば a train *to* Tokyo は a train on which one travels, will travel, *or* (has) traveled *to* Tokyo または a train that one takes, will take, has taken *or* took *to* Tokyo の意味であり、つまり東京まで自分が乗って行く（行った）列車のことを意味しており、これに対し *for* を用いた場合には東京まで乗って行く（行った）ことを意味しなくて、単に the train (bound *or* destined) *for* Tokyo つまり東京行き列車のことを意味している。*To* が普通東京まで乗って行く、東京へ到着するという現実的な観念を示すのに対し、*for* は東京とは直接的な關係はなくいわば抽象的とも言える観念を示すと言うことができる。この間接、直接の關係は以下に引用する例によっても理解できる。

“There are a lot of letters *for* you.”—James Hilton: *Good-bye, Mr. Chips*

They were all addressed *to* him by name.—Hilton: *ibid.* (手紙は皆彼の名宛になっていた。)

Letters *for* you の *for* は letters meant *for* you を意味し、あなたの手に届くようにと出された手紙、最後に届く宛名があなたであると間接的であり、letters *to* you の *to* は上例に見る addressed *to* の意味であなた宛の手紙を意味し直接的である。

Mrs. Ardsley : It's been nice *for* both of them.—Maugham : *For Services Rendered*

Mrs. Ardsley : You're very nice *to* me.—Maugham : *ibid.*

上の第1例は「彼等2人にとって」、第2例は「私に対して」と夫々間接的、直接的である。次の2例にも同様の差が見られる。

One thing was certain : the ultra-modern dolls, with felt features realistically modelled, had no appeal *for* Judy at all.—Jan Struther : *Mrs. Miniver*

(ひとつだけはっきりしていた。即ち本物らしくできたフェルト製の顔貌をもった極端に現代的な人形はジュディにとっては何ら魅力がなかった。)

This blend of two nursery ideologies, three hundred years apart, had particularly appealed *to* Clem.—Struther : *ibid.* (300年も隔った、子供部屋の2つのイデオロギのこの混合はクレムに対して特に訴える所があった。)

尚既に(1)で述べたように *for* には間接性のみならず客観性、希求性を表わす場合もあり、更に非現実性を示すこともある。Listen に関連して使用される *for* と *to* がこれに当る。

He listened *for* her footsteps. (足音が聞えはしないかと耳を澄ます)

He listened *to* the voice (the music, the sound, etc.) (現に聞えているものに耳を澄ます)

この *for* の性質は次の文中に用いられている *for* と同じ性質のものである。

Jimmy : She's so clumsy. I watch *for* her to do the same things every night.  
.....

I've watched her doing it night after night.—John Osborne : *Look Back in Anger*  
(彼女は全く不器用だね。俺は彼女が毎晩おんなじへまをやるんじゃないかと思ってるんだ。

毎晩毎晩彼女がそんなことをしてるのを見てるんだ。)

Alison : But later, we'd both lie awake, watching *for* the light to come through that little window, and dreading it.—Osborne : *ibid.*

(でも後では2人とも目を覚したまま横になって、朝の光がああ小さな窓から射しこんでくるのを待ちうけ、しかもその光を恐れているのよ。)

この watch *for* の watch は wish *for* や hope *for* の wish や hope と同じく自動詞で、孰れの動詞の場合でも *for* は listen *for* の場合と同様、これから起りはしないかと感ずるものを求めての意で、希求性、願望性を示し、併せて非現実性、将来性を表わしている。

(b) 品詞。Train の後で *for, to* がその目的語と共に用いられても *for, to* 以下が train に形容詞的にかかるとは決っていない。Train の前に何等かの動詞、例えば take が付けられて take a train として用いられる場合：

A. take a train が列車に乗る (get on, board) という意味に使っている時は、即ち列車自体の目的地ではなく、列車に乗る人の目的地を示そうと意図する時は *for* でこれを示し、

B. take a train を列車に乗って行くの意 (get on, board a train and travel on it) に使って、到ろうとする下車駅を示そうとする時は *to* でこれを示す。換言すれば、take a train を entrain (at a certain station) または、leave, start from (a certain station) by train の意味で用いる時は *for* を用い、go by train 即ち travel by train (from a certain station) の意味で用いる時は *to* を用い、夫々をその目的語と共に take a train を説明する副詞句として使用する。

He took a train *for* New York every morning at eight-ten.—Clarence Day:  
*Life with Father*

この例のような場合は普通殊に every morning at eight-ten のような句があれば尚更 *for* New York は train にかかるのではなく took a train という動作を示す文句を、副詞として説明しているものと感じられ、従って New York 行きの列車の意ではなく、出発駅を基準として考えた took a train という動作に対してその目的地を「～に向かって」と副詞的に説明しているものと感じられる。尚例には train を用いたが、他の乗物に関しても同じであることに変りはない。

*The plane to Sofia left Bucharest the next morning*—John Updike: *Bech in*

*Romania*

*The plane* to Detroit—Updike: *Couples*

and then I was searched for weapons and got on a *plane* to Houston—Saul Bellow: *Humboldt's Gift*

Then in *the cab* to the hotel—Margaret Drabble: *The Middle Ground*  
*the boat* to Cherbourg—Richard Aldington: *Soft Answers*

And we took a *taxi* to the station.—Joyce Cary: *To Be a Pilgrim*

I took *the bus* to the Moulay Abdullak—Everlyn Waugh: *Work Suspended*

また *for* と *to* の使用の頻度については次の 2 例に見る如く *for* も使用されているが、*to* が極めて多い。これは日常生活に於て乗物の目的地ではなく、自分の行かんとする目的地の方が重要である為であろう。

to get on an express train *for* Paris—Hemingway: *A Moveable Feast*

I was making good money then at journalism, and took the train *for* Paris.—

Hemingway: *ibid.* (当時私は文筆稼業で相当な金を稼いでおり、パリに向けて汽車に乗った。)

—文学部教授—